

# 自然と救済

——“King Lear”の主題を求めて——

両角克夫

## (1) 問題の所在

人類の歴史は何処に向って進んでいくのであろうか。人類の歴史を動かし、個々の人間を操る見えない手は何者であらうか。

Petronius Arbiter は、“Totus mundus agit histrionem”と云っているが、我々は現世という舞台に何処からかやって来て夫々の役割を演じながら又何処かに去っていく。我々は皆役者なのだが、この人類史という劇の作者と演出家は誰なのであろうか。この劇の作家の意図と主題は人間の最大の関心事である。すべて偉大な文学作品は、直接間接に世の鏡 (the mirror up to nature) であり、縮図でもあり、それでこそ此の世に生きる我々に感動を与えるのである。偉大な劇作家は、その創作の過程に於て、上述の問題に何らかの方法で答えんとする。劇作はありのままの此の世即ち nature の鏡であり縮図であると同時に此の世の意味の探究でなくてはならぬ。偉大な劇から受ける深い感動は、すべて人間のいとなみと人間を支配する超人間的な力との葛藤の激しさから来る。人間は挫折によって自己を超える何者かと面接し、自己の存在の意味を問わざるを得ない。“I stumbled when I saw” (“King Lear” Act IV. Sc. I) と呟く Gloucester の言葉の意味は深い。

歴史に於ける人間存在の意味は人類にとって最大の主題であり従って文学に於ける主題も当然これにつながるものと云えよう。文学は人間存在の意味を直観的感性的形式で表現するものであり、論理的概念的であるよりもむしろ形象的暗示的である。作家の解釈にもとづく人間像と世界観、即ち存在と価値の出会いの場面に於て作品は創作されるのである。

Shakespeare の “King Lear” には “Nature” という言葉が頻出し、その意味は多義的であって、それを手がかりとしてこの悲劇を解明していくことは有効なことである。換言すれば、“King Lear” に頻出する “Nature” には、理性や秩序を意味する自然と盲目的衝動を意味する自然との二つの場合があり、この相反する自然の葛藤によってこの悲劇は成立しているとも云えよう。現に、“Shakespeare’s Doctrine of Nature” の著者 John Danby は、“King Lear’ can be regarded as a play dramatizing the meanings of the single word ‘Nature’... The word ‘Nature’, as is well known, has several meanings.”<sup>(1)</sup>と述べている。

然しここに、も一つ概念 “supernatural” を導入するならば “Nature” の意味は更に明白になって来るのではあるまいか。超自然とは内在に対する超越を意味すると同時に、人間の救済にもかかわるものである。人間は生れると同時に舞台に現れ、生涯演技を続け、死によって舞台を去っていく役者であるが、その間、意識的無意識的を問わず何かを待っている存在である。その期待は多様ではあっても “救済” の一語に無限に収斂されていく。我々は

歴史の意味、人間存在の意味を探究する過程に於て当然、主体としての個の救済を問題にせざるを得ない。与件的現実としての自然と、究極的悲願としての救済との緊張関係が人生という芝居の構造であり、その鏡又は縮図としての劇も当然その緊張関係を反映している筈である。然し“King Lear”は文学であり、それ自身の世界をもっている。従ってそれを前提とした上で、自然と救済との相互連関を視点として、“King Lear”の主題に迫ろうとする試みが、この論文の意図である。

## (2) Shakespeare とその思想的背景

T. S. Eliot は1927年の Shakespeare Association に於ける講演“Shakespeare and the Stoicism of Seneca”で思想家ではなくて詩人劇作家としての Shakespeare の存在を強調する。

“Of all of Shakespeare’s plays, ‘King Lear’ is often taken as the most Senecan in spirit. ……In the Elizabethans, the Roman stoicism is visible beneath the Renaissance anarchism. In ‘king Lear’… there is a tone of Senecan fatalism : ‘fatis agimur’. But there is much less and much more. ……I cannot see in Shakespeare either a deliberate scepticism, as of Montaigne, or a deliberate cynicism, as of Machiavelli, or a deliberate resignation, as of Seneca. I can see that he used all of these things, for dramatic ends…….”<sup>(2)</sup>

Shakespeare の思想的背景は様々に云われているが彼自身の思想はその作品を通じて推量されるだけであって、彼の作品は劇であり詩であるから、そこに一定の宗教や世界観を見出そうと努める必要はあるまい。そこには文学的感動があればよいが、その作品を読んで自ら浮んで来る作者の世界観を反省し作者がその作品を通じて何を望み世界をどのように解釈していたかを再解釈し再構成しようと努めることは無駄なことではない。T. S. Eliot も上述の同じ講演で述べている。

“In any case, so important as that of Shakespeare, it is good that we should from time to time change our minds. ……About anyone so great as Shakespeare, it is better that we should from time to time change our way of being wrong.”<sup>(3)</sup>

従って各読者が、夫々の立場から Shakespeare の夫々の作品の中にかくされた統一的な主題を見出し、それによって新しい Shakespeare 像を試みることは許されることであり、これこそ myriad-minded Shakespeare に迫る道である。

Shakespeare も時代の子である。彼の生きた the Elizabethan Age は英国に於ける the Renaissance の最盛時であり、そこには中世の残影が存在すると同時に中世の統一を破る様々な思想の相剋があった。例えば、nature に対する考え方一つとってみても Thomism に於ける如く神と被造物 (nature) との間に類以 (analogy) を認め被造物から神の存在の認識に至る道を肯定する考えがあり、そこでは当然自然は自然法を包含するものであって自らの秩序と合理性を有するものである。又人間は原罪によって神から離れ死にさらされ、その智慧と自由意志は弱体化してしまっただが、神によって創られた当初の神の像 (imago Dei) 即ち理性と自由意志は弱体化はしたが尚残存しているのであって、これが人間を他の被造物と区別するものであり、人間の尊厳もそこにある。但し罪は神との超自然的交りを不可能に

し、神との相似性 (similitudo Dei) を喪失せしめたのである。従って人間以外の被造物としての自然そのものは不変であるが、それを管理すべき人間の智慧と自由意志は弱体となり、更に人間の罪の源泉でもある傲慢 (hubris) による自然支配の欲望に人間自身が支配されることになる。然し神の恩恵によって自然は自らを恢復出来る。これは中世スコラ的自然観であり人間観でもあった。そこでは信仰と理性、宗教と文化、恩恵と自然は調和を保っていた。この中世的調和の崩壊が近代であり、ルネサンスと宗教改革こそその出発点であった。ルネサンスの精神は Hellenism の復活であり人間と自然の再評価でもあった。それは当然文芸と自然科学の発展を促すものであり、人間の心と自然を本来的に善なるもの豊かなものとして捉え、その認識と開拓に情熱を燃やし、それが文化の進展であり歴史の進歩であると考えた。これは謂わば神の内在を前提とすることになり、Pico della Mirandola の如く自然の根柢に徹することにより神の直接的啓示に接せんとするものさえ現れそれは神智学 (theosophy) となり、新プラトン主義の復興となり、自然主義的汎神論、神秘的直観主義に移行していった。これは自然の神秘を把握することによって自然を支配する技術を得んとする秘術 (magic) に発展する。Agrippa von Nettesheim はその著しい例であり、これは Francis Bacon の知は力 (scientia est potentia) の思想を生み、人間の知力の万能とそれによる科学の進歩は歴史の進展であるという科学万能主義に基づく人間万能の進歩主義に向って進んでいく。

これに対して、宗教の面に於ては、人間の内心に徹することによって神に接せんとする神秘説が生れ、中世の神秘家 Eckhardt の流れは、Luther にまでその影を留めた。それは神学的には、中世の普遍論争に発するものであり、スコラに於ける理性 (普遍) と信仰 (個体) との調和統一が破れ、普遍は名目に過ぎず真に実在するものは個物であるとする William Occam の nominalism とそれにともなう individualism や主意主義が強調されることになった。更にこの個人主義は、独我論 (solipsism) となり主観的観念論に発展していく。宗教改革のもう一つの重要な面は、St. Paul の《ローマ人への手紙》——Augustinus の系譜の中で特に強調される人間の原罪ならびに自罪である。人間の罪の強調は、Luther, Calvin に於て著しい。これは人間の文化の営みを評価するルネサンスの人文主義と対立するものであり、従ってその自然観、人間観に於てルネサンス精神に反するものであった。人間の罪の強調は遂には、人間の努力や善意如何にかかわらず或る者は天国へ、或る者は地獄へあらかじめ神によって予定されたものと考え、従って人間の自由意志の否定にまで発展していく。これは二重決定論と呼ばれるものである。これに類するものは、カトリック教会の中でも、Jansenism として Augustinus 解釈をめぐって問題を提起した。

一方ルネサンスの思想として無神論を注意すべきである。Machiavelli——Hobbes の系譜がそれであり、特に Hobbes の心理学は全くの感覚論であり、凡ての精神作用も感覚の変形にすぎず、人間は快不快によって行動するものであり、人間の意志は欲望の最強なるものであって、意志は欲望によって機械的、必然的に規定されるものであり、意志の自由はない。人間は本性的に利己的であって社会的協調的のものではなく、自然に於ける人間は皆敵対関係 (Bellum omnium contra omnes) である。従って社会的秩序は契約によって成立するのであり、この契約を保証するものは国家の絶対的権力以外の何者でもない。ここでは唯物論的決定論と君主専制主義とが結合している。まさに力は正義となるのである。これはやがて神の死を宣言し、力としての盲目的な生命意志の世界支配を肯定する (amor fati) 即ち nihilist

たる Nietzsche への道を用意することにもなった。

一口に云えば、the Elizabethan Age は、中世の統一を残存させながらも、極端なる Calvinism としての puritanism があり、又 Hellenism としての人文主義 (humanism) があり、自然科学の勃興と同時に無神論も有力となり、個人主義、懐疑主義が行われると同時に専制主義が肯定されるといった状況でもあり、多元的で anarchy の様相を呈していたと云えよう。このように相対立する思想状況の中でエリザベス朝の人々は夫々に生きる道を見出さなくてはならなかったのであろうが、何かそこに共通な傾向を敢て主張するならば、それは common sense に基づく中道 (via media) であった。それはルネサンス、宗教改革時代の多元的な要素を包みながら調和を見出すことであり、更に中世的統一と近代的自由との調和を志向することでもあった。

現実的なこの "via media"こそ、Elizabeth I の精神であり、従って the Elizabethan Age を貫く指導精神でもあった。Henry VIII によって設立され Elizabeth I によって確立した英国国教会としての the Church of England の指導原理はまさに実際的な via media であり、Papacy と Presbytery の中間、カトリック的伝承と福音的要素を兼ね備える bridge church であり、又 national と universal の両面をもつものが the Anglican Church の特徴でもある。その神学的中心は、欽定訳聖書の翻訳者としてモーゼ五書や歴史書を訳した Lancelot Andrews であり、又 "Laws of Ecclesiastical Polity" (1594) の著者、Richard Hooker であった。又17世紀になって活躍した "Just vindication of the English Church" (1654) の著者 John Bramhall<sup>4)</sup> も via media の追求者であり、その意味で一面的な思想家 Hobbes に対する鋭い批判者でもあった。

以上神学の領域に関するものであるが、古典学 (humanism) の分野に於ても、人間の教養を尊重する勝れた人文主義者達が、Oxford や Cambridge を中心に活躍した。John Colet, Thomas More, Desiderius Erasmus などがそれであったが、彼等の思想の中心となった人文主義は人間形成に資する学問、特にギリシャ、ラテンの古典学であり、それは人間に関する学であり教養と文化を支えるものと考えられた。ギリシャ、ローマの人間観は、調和的な人間を理想とし、中庸を重んずる。via media は極端をさける中道であり、又中庸でもあって、それは中々困難な道である。人間はとかく極端に走り易く狂信的になり易い存在だからである。又、当時の英国で Montaigne<sup>5)</sup> が読まれ、Shakespeare にもその影響が見られるのであるが、それは懐疑主義としてよりも、まず疑うことによって狂信と極端を避け真実に至ろうとする積極的な意味をもつものとして受入れられたと考えることも出来よう。

このような the Elizabethan Age を背景として劇作家として活躍した Shakespeare は、当時の様々な思想の影響を受けて成長し、それらの思想を登場人物の性格と絡ませながら劇作を続けたことは自明なことであり、劇そのものの構造が conflicts とその展開を導く plot (話しの筋)にある以上、時代の多元的な価値をそのままに受入れ、その成行きを見守りながら、それを劇として統一するために古来の歴史物語などを利用したのである。

又劇はどこまでも play (遊戯) であって、観客大衆に興味を与えなくてはならぬものであり、そのためには言葉の言い回しに工夫が必要であり Shakespeare は英語の表現力を拡大し豊かにする必要に迫られたのである。この点で Shakespeare は英語に於ける言語芸術家としての天才を発揮し、彼の作品が Authorized Version (1611) と並んで Modern English

の記念碑となったのは当然のことである。

Shakespeare 研究の歴史を振り返るならば大ざっぱに云って19世紀に盛んだったロマン主義時代の性格論、20世紀になってからの修辞又は imagery を中心とする言語芸術家又は詩人としての Shakespeare 論、更に the Elizabethan Age の思想的背景の中で Shakespeare の立場を位置づけようとする試みや更には当時の観客大衆の要求に Shakespeare は劇作家としてどのように応じていったかの考察、又 "absurdity" を視点とした研究等もあり<sup>6)</sup>、それらは皆夫々の貴重な意義を有するものである。可能な限りの Shakespeare 像はそれらの諸研究を総合することによって得られるであろうが、all-round な Shakespeare 像を形成することが必要であると同時に、或る一視点から透視的に眺めることによって Shakespeare の心に迫ることも可能であろう。

たしかに、Shakespeare は時代の子として多様な要素を吸収しそれらを文学作品として結合し統一していったのであるが、そこに dramaturgy の上で統一原理としての価値規準があった筈であり、更にその背後には倫理的宗教的価値規準もかくされていると云えよう。それを見出すことは困難を極めることであり、独断に陥り易いのであるが、“King Lear”のテキストに則してそれを試ることにしよう。

### (3) “King Lear”の世界

“King Lear”は1606年12月26日 James I の宮庭で上演された。King Lear の物語は、Holinshed の “Chronicles” の中で見られる B. C. 8世紀頃に遡るものであり、Elizabeth 時代にはよく知られていたし、無名作家による “King Leir” はすでに1594年に登録され1605年には “The True Chronicle History of King Leir, and his three daughters, Gonorill, Ragan, and Cordella.” として印刷されていた。この劇が Shakespeare に刺戟を与えて彼の “King Lear” を書かせたと当然考えられるのであるが、この無名作家の “King Leir” は、happy ending に終るものであり、King Leir は不孝な娘達の仕打に対してもよく忍耐した温厚な人物として描かれ、そこには狂気も Cordella の死もなかった。Shakespeare はこの物語りに大きな修正を加え、かつ sub-plot として Gloucester の悲劇を Philip Sidney の “The Countess of Pembroke’s Arcadia” の中にある “The Tale of the Blind King of Paphlagonia” から採用したのである。

まず主人公ブリテン王 King Lear はお人好し (good-natured) ではあるが、思慮のない又自己抑制の出来ない自己本意の老人である。Lear は人間としては何の魅力もない凡夫であり、腹黒い (evil-natured) 二人の娘 Goneril, Regan に裏切られ、自らは孝女 Cordelia を誤解し、悲惨な境地に陥る。Lear は怒りと悲しみの余り狂気の状態となり、荒野を彷徨し、嵐に襲われ自然の非情さを体験し、徐々に自己に目覚め、又他に対する同情心を獲得していくのであるが、末娘の Cordelia の死に臨み、彼女の死が罪の贖いであると信じて自らも死んでいく。

sub-plot の主人公も自らの姦淫の罪から生れた庶子 Edmund に欺かれ盲目とされ Lear 以上の苦悩を負わされるのであるが、それによって自己の間違いと弱さに目覚めて呟く。

“I stumbled when I saw”.

“As flies to wanton boys, are we to th’ Gods; They kill us for their sport.”

然し死の直前に、嫡子 Edgar の孝心によって救われる。

Lear と Gloucester の運命は平行して進められ、二人ともに自己の罪や間違いから発した煉獄の中で自己の非を認め他への同情心をも与えられるようになって、人間として成長していく。このように見て来ると、これは Lear と Gloucester を中心とする教養劇 (Bildungs-drama) とも呼べるものである。

ヨーロッパの精神史の中で考察を進めるために、Lear をギリシャ悲劇の主人公達、旧約の Job、Goethe の Faust 等と比較してみよう。

Job は自らの罪なくして Satan の試みに会い苦境に陥るのであるが、彼の固い信仰によって救われる。Sophocles の Oedipus 王は善政を行う名君であり、思慮と勇気の人であったが、暗い運命に弄ばれその犠牲となった。Marlowe の Dr Faustus は無限の知識欲に駆られて破滅していく悲劇であり、それは外部的運命や Satan によるものではなくて人間の内部に潜む欲望のもたらす挫折である。近代的な性格悲劇とも云えるものである。然し Goethe の Faust は人間の持つ自然的なあらゆる欲望と能力の解放を象徴する人物である。それは自己の欲望と能力の解放とその追求を通じて成長していく Faust の Bildungs-drama である。そして、様々の誤りと挫折にも拘らずそのたゆみない真実探究の努力の故に最終的には救済されるのである。救済されない Marlowe の Faustus と救済される Goethe の Faust の間には興味深い問題があるが、Shakespeare の Lear の場合はどうであろうか。

“King Lear” の舞台はキリスト教以前の時代に設定されており、従ってそれは多神教の社会でもある。これは、歴史物語りとしての King Leir がキリスト教以前の Britain の王であったからでもあろうが、当時役者が God, Jesus Christ, the Holy Ghost, the Trinity 等を舞台上で口にするのを禁じた “Act to Restrain Abuses of Players”<sup>(7)</sup> が発せられていたことも考慮に入れる必要があろう。

前述した如く Shakespeare は英国ルネサンスの花エリザベス時代に生き、それを代表する詩人劇作家であった。然しそれは思想的には複雑な多元的時代であり、中世と近代との相接する時代でもあった。このような思想風土にあって、Shakespeare はある特定のイデオロギーに commit することなく、まずありのままの社会を眺めそこにエリザベス時代の指導原理であった *via media* をその *myriadmind* の中に保っていたのであろう。Shakespeare は内心ではカトリックであったとも云われているがとにかく表面上は彼は、英国々教会の一員として生き、彼の子供達もそこで洗礼を受け、自らはその教会に埋葬されたのである。その the Church of England はまさに *via media* を象徴するものであり、これは其後現実的な英国人の生活原理として永く生き続けて来たものである。この実際性から良い意味での英国流の経験主義や帰納法も生れ、又現実的な *common sense* の哲学も生れたのである。それは原理を重んじながらも例外を認め原理を拡大しながら例外を包んでいく態度であり、これは英国人の生活の智慧であった。

エリザベス時代の言わば思想的には *anarchy* に於て、彼の顔はむしろ中世を向いていたのではないか。E. A. Strathman も述べている。

“William Shakespeare was born into a world which still lived in reasonable comfort with a philosophical synthesis inherited from the Middle Ages. A few years before Shakespeare’s

death John Donne could write, 'And new philosophy calls all in doubt'. Since Shakesbeare was fundamentally conservative in his beliefs, the old synthesis is more important for an understanding of his plays than the 'new philosophy', yet the processes of change during his lifetime, the questionings of the old verities, produced social tensions which, some critics believe, made possible the great tragedies of the early seventeenth century. ....”(8)

これはまさに妥当な意見である。Shakespeare がその信仰に於て保守的であったという意味は、彼が英国々教会の中に生き続けた中世からの伝統的なキリスト教信仰を保っていたということでもある。従って、自然観に於ても、人間観に於ても無神論を避け、又 Calvinism や predestination を排した Hooker や Andrewes の神学は又 Shakespeare の神学に近かったのではあるまいか。

この見地から “King Lear” に於ける自然と救済の問題を考えてみよう。キリスト教に於ける最大の問題は人間の救済であり、それは罪からの解放ということである。“King Lear” の舞台はキリスト以前の謂わば旧約の時代に置かれている。そこでは多神教と自然とが人間を支配し、人間は未だに福音を知らない。罪と律法とが人間を支配する暗い時代であり人々は唯メシアを待ち望む時代である。Eden は喪失し、Eden の回復は未だなされていない。

J. F. Danby は、“King Lear” に於ける自然を二つに分け、Lear が呼びかけ何かを願う自然を Bacon, Hooker の系譜にある秩序を内包する Benignant Nature とし、Gloucester の庶子 Edmund や Lear の二人の上の娘達 Goneril, Regan に於ける自然は Hobbes 流の Malignant Nature と考えている。中村雄二郎氏<sup>9)</sup>の調査結果を借用するならば、“King Lear” 中に用いられている自然及びその派生語の回数は51回 (Act I で17回, Act II で14回, Act III で11回, Act IV で8回, Act V で1回) に及び自然がそのままの名詞形で使われているのが40回 (Nature が9回, nature が31回) である。そのうち Benignant Nature 即ち中村氏の表現をかりれば、神の被造物としての秩序と理性を保つ *natura naturata* を意味するものが13回、Malignant Nature 即ち中世的自然から離れ盲目的な生の衝動としてのエロスと死の衝動タナトスの弁証法的存在者としての *natura naturans* を意味するものが8回、其他これら二つの意味が複合したり又は中性的なものがあり、総じて *natura naturata* の側に入るもの15回、*natura naturans* の側のもの16回となっている。後者の自然観は、近代的な無神論的自然観や、科学的自然観即ち没価値的自然観にも発展していくものである。

Shakespeare には中世以来の Morality Plays の影響があると考えられているが、“King Lear” にもそれが出ていると思う。Morality は本来 Miracles から派生し、例えば “Everyman” に於ける如く Fellowship, Kindred, Knowledge, Beauty, Strength, Good Deeds, 等の抽象概念が擬人化され教訓的な目的のために構成されるのがその特質であるが、“King Lear” に於ては自然の相対する二つの意味が登場人物の中に具象化され擬人化されている。Benignant Nature と Malignant Nature, 摂理的自然と盲目的自然との葛藤から生れ展開するのがこの劇の構成であり、多少複雑ではあるが、その背後に勧善懲悪とも云うべき didacticism が潜み、これが “King Lear” の poetic justice となっている。この劇は中世の Morality の如く素朴な didacticism ではなく、複雑なルネサンス的思想の衣をつけてはいるが、究極的にはキリスト教的倫理観の上に立っている。それはモーゼの十戒とそれを完

成する神の愛(agape)の思想である。この劇は神の愛から離れ次々と十戒を犯していくところに生れる人間の罪の悲劇であり、Satan を象徴するかの如き Goneril, Regan, Edmund と天使を象徴するかの如き Cordelia を両極とし、その中間に Lear と Gloucester を配している。従って筋の展開は Lear と Gloucester の心理的変化と平行して進められ、悪玉としての Goneril, Regan, 善玉としての Cordelia は終始不変の姿を保っている。ここで善悪を区別する基準は十戒であり、そこでは親と子、(Honour thy father and thy mother), 人と人(Thou shalt not kill.), 男と女(Thou shalt not commit adultery.), 人と所有(Thou shalt not steal. Thou shalt not covet thy neighbour's house nor wife nor servant, nor his ox, nor his ass, nor any thing that is thy neighbour's.) 人と言葉(Thou shalt not bear false witness against thy neighbour.)<sup>40</sup> 等夫々の倫理が定められている。これらの秩序が破られていくところに悲劇が始りこの罪を贖い(redeem)秩序の回復への方向に於てこの悲劇は終る。

この劇はまず Gloucester の犯した姦淫の罪の下に生れた不幸な庶子 Edmund の登場によって始り、父 Gloucester とその嫡子 Edgar に対する Edmund の反逆、Goneril, Regan のその父 Lear に対する不孝と裏切り等によって劇の筋は展開し、Gloucester と Lear はその苦しみの過程に於て己の非を悟り、謙虚となり真実に目が開けていく。

王位を去りながらも尚その名目上の権力に執着し、領地を与えることが親として娘に対する最大の愛情であり、それによって娘達の己に対する孝心をも獲得出来る信じ、末娘 Cordelia の孝心の真実を知り得なかつた Lear は俗物であり愚かな dotage にすぎないが、自らの招いた苦悩を通じて自らの愚劣さを悟っていく。まさに Regan の言葉の通りである。<sup>41</sup>

O! Sir, to wilful men,

The injuries that they themselves procure

Must be their schoolmasters.

(Act II. Sc. IV.)

娘達の filial ingratitude に対する怒りに狂いながら嵐の荒野(heath)に彷徨い出た Lear は激しい煉獄の焔に焼かれなくてはならない。彼はすべてを呪う。

Lear. Blow, winds, and crack your cheeks! rage! blow!

.....

Crack Nature's moulds, all germens spill at once

That makes ingrateful man!

(Act III. Sc. II.)

然しやがて Lear は自己批判を通じて気の毒な人々に対する同情心を獲得していく。

Lear.

O! I have ta'en

Too little care of this. Take physic, Pomp;

Expose thyself to feel what wretches feel,

(Act III. Sc. IV.)

そしてこの苦悩は Goneril, Regan の如き不幸者を生んだ自分に対する天罰と考え、更には自分がこの世に生れたことを歎く。

Lear. When we are born, we cry that we are come

To this great stage of fools.

(Act IV. Sc. VI.)

やがて Lear は Cordelia と再会し、彼女から父としての祝福を求められた時、夢うつながら自らの愚かさとし非を認め告白し娘に許しを請うのである。

Cor. O! look upon me, Sir,  
And hold your hand in benediction o'er me.

No, Sir, you must not kneel.

Lear. Pray, do not mock me :  
I am a very foolish fond old man,

Lear. You must bear with me.  
Pray you now, forget and forgive : I am old and foolish.

( Act IV. Sc. VII. )

終りに臨んでの Cordelia と Lear の対話は興味深い。

Cor. We are not the first  
Who, with best meaning, have incurr'd the worst. ....

Shall we not see these daughters and these sisters ?

Lear. No, no, no, no ! Come let's away to prison ;  
We two along will sing like birds i' th' cage :

And take upon's the mystery of things,  
As if we were Gods' spies : .... (Act V. Sc. III.)

尚 Lear は Cordelia とともに Edmund によって死の牢獄に連れ去られる時、

Lear. Upon such sacrifices. my Cordelia,  
The Gods themselves throw incense. (Act V. Sc. III.)

と云う。又多少劇の筋を遡るならば、絶望的な Lear に対し声をかける或る gentleman の台詞は注意に価する。

Gent. A sight most pitiful in the meanest wretch,  
Past speaking of in a King ! Thou hast one daughter,  
Who redeems nature from the general curse  
Which twain have brought her to. (Act IV. Sc. VI.)

Danby はその著 “Shakespeare's Doctrine of Nature” (p.125) で、  
“The twain referred to are not Goneril and Regan. Quite obviously Shakespeare is referring here to Adam and Eve.”

と云っているが、これは余りにキリスト教的な意味を強調しすぎたものであって、やはり Kenneth Muir もそのテキスト “King Lear” (p.183) で述べる如く、この twain は Goneril と Regan を指すものであろう。又 Danby の使用するテキストは、God's spies となっており (The Penguin Shakespeare edited by G. B. Harrison—The Tragedy of King Lear p.125) 又 Cambridge University Press から出ているテキスト (King Lear, edited by G. I. Duthie and J. D. Wilson, p.109) でも God's spies となっていて、ともにキリスト教の一神論の意味を採っているが、これも自己のテキスト p.200. の脚註で K. Muir が “Gods' ] There is no apostrophe in F or Q, and I follow Perrett in assuming that Shakespeare intended the plural since he was writing of a pagan world.” と述べている通りであると思う。前述した如く、“King Lear” はキリスト以前の時代を舞台としており、それはたしか

に pagan world ではあるが、キリスト教的視点に立つならば旧約の時代とも云えるのである。従って、そこには未だキリストの福音の如き救済に関する完全な啓示はないが、無神的世界ではなく、又ギリシャ古代の意味での多神教の世界でもない。十戒に見られる如く神と人間、人間と人間の倫理的基準は明白であり、それを背景として、この劇が作られていることは明白であろう。前述の, Gods' Spies (Johnson によれば, これは angels commissioned to survey and report the lives of men), sacrifices, redeem, の如き言葉はキリスト教的思想を直接に反映するものであり、喪失した樂園としての nature は、義人の犠牲によって本来の姿に恢復させられるのであり、換言すれば人間の救済のためには、罪の贖いが必要なのである。それは自然を救うものであり、自然を超えたものである。

Lear が苦悩を通じて、権力欲、所有欲、激情の如きものから洗われて、apatheia の如きストア的平静にまで至ることはたしかにこの劇の重要な側面であり、これは Gloucester についても同じである。T. S. Eliot も云う如く、Shakespeare がこの劇に於て stoicism をその主題の中に組み入れたことは認められるが、Lear はその自己抑制、patience のみによって心の平和を得たのではなく、最終的には Cordelia の天使的で、無私の愛を必要としたのである。これは愛の勝利を暗示するものでもある。これが “King Lear” の主題の核心であると考えたい。

又 Lear が絶命した Cordelia を両腕に抱いて登場する場面、

Kent. Is this the promis'd end?

Edgar. Or image of that horror?

Alb. Fall and cease.

(Act V. Sc. III.)

に対して、A. C. Bradley は “Shakespearean Tragedy” (Macmillan, London, 1952) p. 328. の脚註で、“The promis'd end' is certainly the end of the world.” と述べ、更に Shakespeare の脳裏には Matthew xxiv や Mark xiii の終末の日の苦難と試練の様相があったらしいと云っている。たしかにキリスト者にとっては終末とキリストの再臨の日まで苦難を耐えていかななくてはならない。それを可能にするのは、信仰と希望と愛なのである。

Goneril と Regan は不孝と姦淫と殺人と自殺の罪を犯し続けて、遂に絶望の中に死んでいく。然しやはりこれは彼女達が自ら選んだ道であって、予定的不可抗力のものではない。彼女達の運命は彼女達に責任がある。彼女達は最後に悔い改める時間があったかどうかは分らないが、劇中とは云え、悪玉として設定され情欲と物欲の虜になった彼女達は哀れである。

Edmund の場合はどうであろうか。Edmund は父 Gloucester の姦淫の罪の下に生れ、その重圧の下で bastard として成長して来た。その苦悩は父親の責任である。然し盲目的な生命意志、権力意志としての自然を自らの生活原理として選びとったのは Edmund 自身である。彼は運命論者ではない。例えば Edmund の次の台詞、

Edmund. This is the excellent foppery of the world, that, when we are sick in fortune, often the surfeits of our own behaviour, we make guilty of our disasters the sun, the moon, and stars, as if we were villains on necessity, fools by heavenly compulsion, knaves, thieves, and traitors by spherical predominance, drunkards, liars, and adulterers by an enforced obedience of planetary influence; and all that we are evil in, by a divine thrusting on.

(Act I. Sc. II.)

は彼が極めて近代的な人間であり、自己が自由の主体であることの自覚を語るものである。彼の奸計が挫折しその兄 Edgar との決闘に敗北した時、自己の非を認めると同時に、自己の没落を自覚する。

Edmund. The wheel is come full circle; I am here. (Act V. Sc. III.)

Goneril は Edmund に対する不倫の情欲の虜となり、嫉妬にかられて妹の Regan を毒殺し自らも自殺するが、二人の女の屍を眺め自らの死にも臨んで、

Edmund. I pant for life; some good I mean to do

Despite of mine own nature. (Act V. Sc. III.)

と云って Lear と Cordelia の殺害の命令を取消させようとする。Machiavellian としての Edmund のこの心理的転換は読者の予想に反して余りにも簡単であるが、最後には Edmund に悪魔的な道を捨てさせた Shakespeare の意図は何であったか。これは Shakespeare が、性格的な宿命観を避けて、性格の可変性を強調したものに他ならない。Shakespeare の悲劇はギリシヤ悲劇が運命劇であるのに対し性格劇であるとされるが、決して性格が予定された不可変のものであり、宿命的なものというわけではない。“King Lear”の悲劇は Benignant Nature と Malignant Nature との観念上の対立葛藤の劇であると同時に、Lear を中心とする登場人物の心理的、主体的内部葛藤の劇でもある。

又、性格は決して先天的運命的のものではなく、主体が自ら選び、行為を繰返す間に形成されて来る習性の一つである。これに関しては、16世紀に the Church of England の教義的立場を明らかにするために書かれ、現在にまで存続している The Thirty-Nine Articles of the Church of England の内容は多くの示唆を与える。この中に人間の本性 (The Nature of Man) に関するものがあり、その中で自由意志が肯定され強調される。人間の習慣や救済にもそれが重要な要素となる。例をあげるならば、

God's grace needs to be met by man's free-will.

Every time that we commit an act, our act helps to form a habit. Our aim is by a constant repetition of acts to form the corresponding habit.

When we speak of ourselves free, we mean that we are the ultimate and responsible authors of our own conduct.

Man has the power of selecting and making his own motive and following it and that he is not simply the passive victim of the most violent desire.

In the true life of man, there is union of the grace of God and human free-will.

従って、Calvinism は排される。

Calvin himself did little more than push to its logical extreme one side of the teaching of St. Augustine. St. Augustine, like St. Paul, had experienced a sudden and violent conversion. Hence, inevitably, he was more conscious of the power of God in his own life and laid less stress upon the need of human effort.

然し人間の自由のみを強調する Pelagianism も極論として排される。

At the other extreme stands 'Pelagianism'. Pelagius was an excellent monk who had always lived a decent life and known no great moral crisis. …… He taught that Adam's sin had injured no one but himself.<sup>(12)</sup>

つまりここでは人間の自由意志と同時に人間の原罪、つまり弱さが説かれ、人間論としても *via media* が説かれている。

Shakespeare の人間観もこの線を基本とするものであった。Edmund の心理的転換も、その挫折を通じて来るのであるが、それを契機として Edmund の行動の選択が方向を変えたのであり、これは Shakespeare の人間観の一面を物語るものである。

#### (4) 結 び

“King Lear” は抽象観念の擬人化を行った中世の Moralities の如く、benignant nature, malignant nature 二つの抽象的観念を両極に据えて、その象徴としての人物を配し、その中間に Lear, Gloucester を配して、中間人物の心理的变化と平行して筋の展開を志向した悲劇である。主人公はやはり Lear であり、Lear が自らの招いた不幸の苦悩を体験し、人間として成長していく Bildungs-drama とも云える。その過程は、Seneca 的 Stoicism の色合いの強いものであり、忍耐と克己であり apatheia に到る運命論的諦念の道でもあった。然しそこに、二人の姉の罪を贖う (redeem) Cordelia の犠牲 (sacrifice) を設置し、それが自然の倫理的秩序を回復すると一登場人物に語らせていることは (Act IV. Sc. VI.), 人間の救済は Stoicism や Pelagius の如く人間の努力や忍耐のみで成し遂げられるのではなく罪なきものの犠牲的愛、即ち超自然的な恩恵 (God's grace) を必要とすることを説くものである。人間の救済は、上述の the Church of England の宗教要綱の中に述べられている如く、神の恩恵と人間の自由意志の結合によるものであり、これは “King Lear” の背後にかくされた自然救済の論理であり、主題そのものでもあった。

ただ、この舞台が、キリスト教以前の時代に置かれており、又当時の英国の思想的多元性と anarchy を反映しているために我々はこのキリスト教的主題を直接的ではなく間接的に認めることが出来る。

この劇の最後は、benignant nature を代表する人物も、malignant nature を代表する人物も共に死んでいく。そして劇の余韻的效果としては、無常感と同時に catharsis が観客又は読者の心理を支配する。

又この劇が、1594年に登録された作者不明の “King Leir” の如き happy ending を避けて書かれたのは、正しき者が必ずしも此の世で勝利を得るものでなくて、多大の試練に会うものであることを教えるためであり、それにもかかわらず自然の秩序即ち摂理の支配を暗示していると思えるのである。

又 Fool のこの劇に於ける役割は、作者の代弁者かとも思えるものであり、satire と irony による所謂 English humour を通じて、重苦しい雰囲気をやわらげ、観る者の立場から狂気の状態にある Lear に対する同情的な批判と、人生の知恵を教訓的に物語っているのである。

## 参考文献と註

- (1) John F. Danby : Shakespeare's Doctrine of Nature—A Study of "King Lear"—(Faber and Faber, 1948) p. 15.
- (2) T.S. Eliot : Selected Essays (Faber and Faber, 1966) p. 133.
- (3) Ibid. p. 126.
- (4) Ibid. pp. 354-362.
- (5) G.O. Taylor : Shakespeare's Debt to Montaigne (Phaeton Press, New York, 1968)
- (6) Jan Kott : Shakespeare our Contemporary, Translated by B. Taborski, Preface by P. Brook, (Methuen, London, 1967) pp. 100-133.
- (7) F.E. Halliday : Shakespeare in his Age, (Gerald Duckworth, London, 1964) p. 290.
- (8) E.A. Strathmann : The Intellectual and Political Background—General Introduction to "William Shakespeare : The Complete Works" (Penguin Books, Baltimore, 1969) pp. 1-9.
- (9) 中村雄二郎 : 言葉とコトバにおける文化と自然 ("文学" vol. 37, 岩波書店, 1969) pp. 75-78.
- (10) The Bible, Authorized King James Version, Exodus 20.
- (11) 以下 "King Lear" からの引用はすべて次のテキストによる。King Lear : edited by Kenneth Muir (Methuen, London, 1967)
- (12) E.J. Bicknell : A Theological Introduction to the Thirty-Nine Articles of the Church of England (Longman, London, 1970) pp. 191-196.

☆

本文としては上述の Kenneth Muir のものと同時に "The Norton Facsimile—The FIRST FOLIO of SHAKESPEARE, prepared by C. Hinman," (Norton, New York, 1968) を参照した。

## Summary

### Nature and Salvation

#### —A Study of the Theme of “KING LEAR”—

by Katsuo MOROZUMI

The author tries to approach “King Lear” from the ethical and theological point of view. Though Shakespeare’s religion is not clear, it will be admitted that Shakespeare was conservative in his beliefs which are expressed in his plays. In appearance he belonged to the Church of England whose leading principle of “via media” is observed through his works. From the point of view of dramaturgy, Shakespeare in his “King Lear” adopted the manner of morality plays which makes use of symbols of abstract ideas such as benignant nature and malignant nature. And the main theme of this play is the salvation of Lear. On his way to salvation, Lear through his suffering and passion became humble and patient, being conscious of his own fault. But the salvation of Lear needed the sacrifice and redemption of the sinless Cordelia. Here we can see that man’s salvation needs not only man’s free-will based upon benignant nature, but also something supernatural which may be called God’s grace. And this theological idea is clearly expressed in the Thirty-Nine Articles of the Church of England.

Though this tragedy is situated in a pagan world before Christ, the Christian idea of man is hidden under the garments of the Stoicism of Seneca surrounded by conflicting modern European thoughts after the Renaissance and the Reformation.